人間臨終図巻

――高齢者文学人生論

山田風太郎（1922-2001）
『人間臨終図巻』全三巻新装版（19967）「徳間書店」
『あと千回の晩飯』」（1997）「朝日新聞社」
『戦中派不戦日記』(1945)「番町書房」
参考：山田桂子『夫・山田風太郎の臨終まで』
（「文藝春秋」2001年10月号）

臨終の人間「ああ、神も仏もないのか？」
神仏「ない」

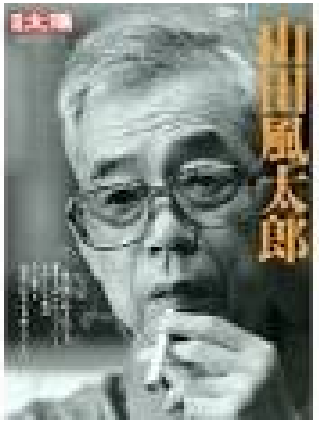
山田風太郎は、二〇〇一年六月、パーキンソン氏病による筋肉の萎縮で、呼吸困難に陥った。以後五十九日間、人口呼吸器をつけ、チューブで栄養剤を注入したが、最後は苦しむ様子もなく、眠るように死んだという。七十九歳。（山田桂子『夫・山田風太郎の臨終まで』による）。

「ああ、神も仏もないのか？」と嘆いた気配はない。『人間臨終図巻』によれば、その問いに対して神仏が「ない」と答えたことになっている。

『人間臨終図巻』は九百二十余の実例を通じて生死を考えさせてくれる書だ。数が多すぎて紹介しきれないが、その中で日本人に大きな影響を与えた外国人の臨終の様子が特に興味深く、人類の運命を考える上で若干の参考になる。

ペルリ・・・「幕末にもっとも日本をおどしたのは、アメリカのペルリとイギリスのパークスだが、どちらも心臓リューマチで死んだのは一奇である。――ペルリの来航は、要するにアメリカの中国貿易と捕鯨の基地として日本の港を欲したからであつたが、百余年後、アングロサクソンは、日本人による捕鯨反対のリーダーになつた。彼らの必要性、不必要性がその時の世界の掟となる。もつとも、ペルリはユダヤ人であった」。

ヒトラー・・・「拳銃自殺。東条英機がいなくても太平洋戦争は起つたろう。しかしヒトラーと



人間臨終図巻 ―――― 高齢者文学人生論

いう存在がなかつたら、太平洋戦争は起らなかつたにちがいない。これほど全日本人の運命に――子々孫々にわたつて――激甚な影響を与えた異国人はほかにない。いや、日本人にもいない」。

ルーズベルト・・一九四五年二月、ルーズベルトの動脈硬化はすすんでおり、頭脳の働きはにぶり、ために彼はこのヤルタ会談において外交的にスターリンにまんまとしてやられたといわれる。すなわち、東欧をソ連の鉄のカーテンとする端緒をひらき、またそれまでの太平洋戦争の経過から日本との戦闘はなお一年半つづき、米軍の犠牲は少なくとも百万を要すると判断して、ソ連軍の至急の参戦を請うという借りをつくったのである。

スターリン・・・スターリンは。一九五三年三月四日二度目の卒中が心臓と呼吸器を冒し、三月五日午後九時半に死亡した。彼の死は、神でも超人でも鉄人でも天才でも悪魔でもない、通常の肉体を持った人間の通常の死にかたであつた。しかし、それが彼の場合、異常だつたといえる。

チャーチル・・・最後の日も近い誕生日に、彼（チャーチル）は娘に述懐した。「私はずいぶんたくさんのことをやって来たが、結局何も達成できなかつた。死去したのは一九六五年一月二十四日午前八時であつた。「何もかもウンザリしちゃつたよ」というのが最期の言葉であつた。

病人の氷枕やヒヤシンス　　作者不明